
スキルオーナー

秋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スキルオーナー

【Nコード】

N0284Z

【作者名】

秋色

【あらすじ】

テンプレすぎる学園超能力系？

作者の能力次第で味が出てくるストーリーです。

ただ！ 短編です。

ここでは誰でも自分が正義だと主張できる。だが欠点も多々ある。一番問題なのはその正義が間違ったベクトルで進むことだ。

ギルドというシステムを導入した日本は昔と比べて平和になったのか、それともその逆か？ と問われれば誰も答えを言える者はいないだろう。

ギルドシステム それは簡単に言うと同じ思想を持った者同士が手を組みギルド本部からの依頼を受け悪を滅ぼしていく。と名目で作られたシステムだ。だが手軽に仲間を集める事ができるという利点が裏目となり犯罪組織も年々増えていく形となった。

今では若者の間では絶大な人気があり、手軽に仲間が集まるのでサークル感覚で使われている。小遣い稼ぎにもなり、今もなおギルドに入りたいという者が後を絶たない。

その事もありギルドシステムには様々なルールができた。

1 ギルドレベルにより依頼の難易度が変わる。

2 依頼を受ける場合、ライセンスを提示し規定ランクに達している事。

3 ギルドマスターが問題を起こした場合、即ギルドは解散。

4 ギルドメンバー資格、満15歳以上。

大まかにはこのルールさえ覚えておけば問題ないだろう。細かいルールはまだあるが、とりあえずはこのルールがギルドメンバーが覚えておかなければいけないこと。

能力者、無能力者なんてのは些細な事。それぞれ自分の正義が間違ったベクトルさえ向かってさえいなければ一切の問題はない。

それが現実。

今年三月に中学を卒業し、待ちに待ってなどいない高校生活が始まるうとしていた。

とりあえず学校にだけは通っておこう。というくらいの気持ちしかない。

大都市の高校に今日から通う。【霧島 李人】は電車を乗り継ぎ最寄駅から徒歩5分ちよつとの学校を目指し登校中。

四月七日、今日は李人が通う高校の入学式。

李人は特に緊張した面持ちもなく大きな欠伸をしながら坂道を登って行く。

桜の木が坂道いっぱいになって植えられており、入学式の今日は満開のようだ。

周りには、同じ新入生達が皆緊張した面持ちで坂道を登っている。李人は周りの新入生達と比べると比較的、緊張しておらずとても余裕があるように見える。

李人からしたら本当に3年間通うだけ、という認識しかないのだ。

入学式は午後からなのでこの時間に学校を目指している生徒は同じ新入生。

坂道を登ると、学校の敷地が視界に広がる。

校門がすぐそこにありその奥にはグラウンド、校舎、その横には体育館らしき建物が。

見た目は何処にでもありそうなくごく普通の高校。

だがこの学校は普通の学校とは少しだけ違う。

ここは俗に言う能力者学校。

他校の生徒はこの学校の事をこう呼ぶ。

『SOS』

スキルオナーズスクールの略語。

能力の事をスキルと呼ぶ者が多くなり今では能力の事をスキルと

呼ばれる方が多いのだ。

この学校に通う生徒のほとんどの生徒は皆スキル保有者なのだ。
もちろん李人もその中の一人。

学校の敷地内に入り、真っ直ぐ校舎の中へと入る。

校舎に入り生徒玄関で、靴を脱ぎ、靴を空いているロッカーへと入れる。ロッカーの中に用意されていたスリッパに履き替え、生徒玄関を少し出ると受付を行っている5名の教員がいた。

「こんにちは。霧島李人です。僕の教室は？」

李人は受付の一人に自分の教室を訪ねる。
髪をオールバックにしている40代前半だと思われる教員は、机の上に置いてある『パス』を手に持ち操作を始める。

『パス』とは簡単に言えば、携帯電話。

ケータイ スマートフォン パス。言わばスマートフォンよりも更に進化した機体。

様々な色や形、大きさなどがあり、今では『パス』が主流で使われている。

李人自身、黒色のパスを持ち歩いている。

「きりしまりひと」

男はパースに向かって言葉を発した。

すると即座にパースは情報を見つけ、画面上に映し出す。

「……霧島君、君はEクラスです」

男は年相応な優しい声音で、極めて冷静に真実を告げる。

「へ？」

何ともな抜けな声が漏れる。

李人はその場に時間にして数秒だが、固まった。

この学校の入試では、実技、筆記がある。

能力者学校であるこの高校では筆記テストよりも実技テストの点数の方が配点が高い。

李人は自身、筆記ではそこまで良くはないにしても、悪くない点数を取れている自信がある。中学時代から自分の能力の高さにもある程度の自信があった。実技テストでも悪くないはずだ。

Eクラスって事は……一番ランクが低いって事か……？

そう、この学校は成績順によってクラスが振り分けられる。

E・D・C・B・A・SとEクラスが一番成績が悪く、Sクラスがダントツで成績が良いクラスだ。

つまりEクラスは6クラスで最も成績が悪いクラスとなる。

「一年のクラスは三階だよ。Eクラスってこここの階段を上がって一番奥だね」

男は優しい口調でそれだけ告げると、後ろに並んでいる生徒に名前を訪ね、李人の時と同じようにパースに言葉を発する。

ここはSOSの三階奥。そう、1・Eクラスの目の前。
心なしかこの教室だけ空気が重い。他の教室が黄色くまぶしく感じる。

李人は、教室の扉の前で項垂れていた。

「ゆ、夢だと誰か言ってくれ……」

現実逃避。

だたでさえ暗い色を放っている教室なのに、李人のような者が教室前に立っているのは誰もがここは負け犬クラス何だな。と思っ

まう。

ああ……やり直したい。

どこで間違った？ 筆記で簡単なミスはしていないはずだぞ。実技の時も試験管が驚くような顔していた覚えさえある。

それなのになぜ、よりにもよって一番ランクの低いEクラスなのだ。

教室の中からはガヤガヤと楽しそうな声が聞こえてくる。

早くも友達を作ろうと必死になっている奴がグループ作りを始めているのだろう。

李人は時間ギリギリだったためクラスのメンバーはほとんど揃っている。

早くも遅れを取る形となったが、今はそんな事はどうでも良い。そもそもこんなクラスで仲良くやっていける自信が李人にはなかった。

李人は教室の前で、軽い鬱病症状のまま立ち尽くしていると、本チャームが鳴り担任の教師が教室へと来た時に発見され、憐れむように肩をぽんぽんと優しく叩かれ教室へと導かれたのだった。

教室内は広く、パソコン一台を置いてもまだまだ余裕のスペースがある程のシステムデスクが生徒分並べられており、生徒同士の机

の間隔が非常に広く感じられる。

最近の学校では授業はノートを取らず、パソコンに保存していくという形のシステムになりつつあり、机というものはなくなりつつある。

李人は、中学校からこのような環境で授業を受けてきてるので特に新鮮味は感じられなかった。

李人は、窓側の一番前の席に座っていた。理由は単純にここが空いていたから。

普通初日は出席番号等で決まっているものなんじゃないのか？と李人は思うのだが、担任の教師が言うのだから間違っではない。とでも思っているか誰も疑問に思っていないようだ。

担任の第一印象は、まず爽やか。次にスポーツマン。うん。クラスメイトの半分くらいはこのような印象を受けたのではないだろうか。

歳は二十台中盤、後半だろうか。体格が良く身長も高い、短く切りそろえられた髪を整髪剤で立たせている、顔も中々のイケメンなのだ。

その爽やかな担任は緊張した面持ちでコホンと一つ咳払いをすると、自己紹介を始めた。

「馬場みちるだ。とりあえずは一年間宜しくな。」

ホワイトボードに自分の名前を書き、照れたような笑いを見せる。

気のせいかどこかで舌打ちが聞こえたのだが、それは気のせいだろう。

たしかに李人も今のは少しながら感情が表に出そうになったのだが……。

「っと、それじゃ自己紹介をしてもらおうかな。それじゃ出席順に」

あ、という声を馬場が漏らした。

罰が悪そうな顔で、あちゃーと呻いている。

「そういえば適当に座ってもらったんだな。すまない、座り直してくれ」

李人はこれでまた新たに不安要素が増え頭を抱える。

ああ……本気で夢だと言ってくれ。

せめて担任くらいはまともであって欲しかった。

そんな淡い希望も潰え、さらにブルーになっていく李人とは、反比例し馬場は最初の緊張感もなくなり今では妙にうざいテンションになりつつある。

「こんなもんで一応全体的な説明は終わりだ。……あ、そうだ、あと一つ明日の事なんだが」

馬場はそこで顎に手をやり、うーんと何やら考えている。皆が無言のまま馬場に視線を送っている。

「んー明日、入学式のクラス代表戦の事なんだが、まあ誰が出たって変わらないだろう。Eクラスだしな」

ニカッと爽やかに笑い、さらっと毒を吐く腹黒爽やか教師であった。

そうか代表戦。それに出れば証明できる。自分の実力がEクラスレベルではないことを。

もちろん代表戦で負ければ、李人は思い違っていただけにすぎない。

入試試験の結果通りに割り振られ、実力がなくEクラスに必然的になったという当たり前の解答が待っているのかもしれない。

だが、中学時代から周りを騒がせていたほどの能力者の利人はそれを認めなくなかったのだ。

何かのミス、そうに違いない。そう思うことでまだ李人のプライドは保っていた。

代表戦　この学校のイベントの一つでもある。

それは入学式に行われ、一年生の6クラスそれぞれの代表を選び、模擬戦闘を行う。

この学校を卒業する者の多くは政府のために力を注いでおり、日本中から期待されている。

そのため毎年、今年の有望株の生徒に目を付けておこうというイベントなのだ。

政府以外にも色々な組織が見学に来る。

その中にはギルドの長達も多くいる。いわば、スカウトしにくるのだ。

と、言っても大半の目的はSクラスの代表を見に来るわけなのだが……。

(後書き)

またしても短編です。

テンプレすぎる内容につき短編に……。

やはりオンラインゲームを舞台にした小説が僕には合っているみたいです。

はは…… のもテンプレすぎますけどねー……汗

駄文を読んで頂きありがとうございます……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284z/>

スキルオーナー

2011年12月1日01時47分発行